

精神史としてのブルクハルト史学

——意識と歴史——

森 田 猛

はじめに

「だが、世界発展の連続性という形象を自らの内において可能な限り完全なものへと補完することは、教養ある市民層の特別な義務である。このことこそ、意識をもつ者としての彼らと無意識の者としての野蛮人とを区別するものである。それは、過去と未来へのまなざしがいずれも人間を動物から区別するのと同じである。たとえ過去が非難を、未来が不安をもたらそうとも。動物はそのことについて何も知らないのである」¹。

講義「ギリシア文化史」(二八七二—一八八六年)序論にみられるブルクハルトのこの文言は、教養ある市民層²の果たすべき役割について、一般的な示唆を述べただけのようにもみえる。だが、詳細にわたって検討すると、歴史をもつ唯一の存在である人間の本質、あるいは歴史と人間存在の關係にかんする深い洞察にみちたものであることがわかる。一八六八年に史学論的講義「歴史の研究について」をはじめ、講じて以来、ブルクハルトは「哲学的五年間³」と称される史学思想の深化と発展の時期を迎えた。その円熟した成果はこの文面に垣間見ることができらる。だが、それだけではない。この講義草稿を執

筆した時期に、ドイツ帝国が戦火のなかに創建されたことを考えあわせるとき、ここには時代の危機的状況に対する判断をも透かし見るこ
とができるのである。彼は普墺戦争と普仏戦争というドイツ・ナシヨ
ナリズムが引き起こした大戦争をまぢかに眺め、ヨーロッパ世界の変
質を確信しながら、歴史学が果たすべき役割について考察を続けてき
た。そして、教養層に対する教育を自らのライフワークとしたのであ
る⁴。

普遍的問題に対する洞察と時代判断との接点に立つこの言葉は、歴史学教育へと収斂した彼の営為全体に光を当てるものであったといえ
るだろう⁵。本稿は、そのような見地から、この文言の分析を手がかりに、ブルクハルトの営為の基底にあったものを明らかにしようとする
ものである。それが普遍的であると同時に時代的な問題をはらんで
いるがゆえに、考察は理念史的でありつつも、社会的脈絡に配慮した
ものでなければならぬ。教養層に対する教育という彼の社会的実践
は、思想と社会を媒介するものであった。ブルクハルトの思想を歴史
的に読み解こうとするとき、この社会的実践と関係づけながら考究す
ることが不可欠である⁶。

一、教養と野蛮

ブルクハルトの教養ある市民層についての文言は、つぎの三点に分解することができる。第一に、教養層は「世界発展の連続性という形象を自らの内に」構成するという固有の義務を負っていること。第二に、この階層の対立概念として野蛮人が提示され、両者を隔てるものが意識というものの有無であること。第三に、教養層と野蛮人の対比は、人間と動物の対比と類似したものとし、人間と動物を区別するものとして歴史的感觉をあげていること、以上である。

これらをブルクハルトの思想と社会的実践とのかわりににおいて解していききたい。第一点は、彼の教育目標にかかわるものと評価することができる。ブルクハルトは大学教育を通して、類型的考察方法を用いた歴史研究への手ほどきを行い、成人教育によって主体的な歴史研究に対する刺激を継続的に行ったが、それは教養ある市民層特有の歴史的作用に配慮したものである。中等教育を経て古典語を理解するこの階層は、一次史料から直接史実をくみ取る能力をもっている。多くの人がびとにとって史実は専門家から与えられる外在的なものであったが、彼らは専門家から独立したディレクタントとして、それを内在的なものとなしうる。ブルクハルトの教育は、個人の内面的成長を機軸とした主体的な歴史考察を促すものであり、その内面に歴史像を独力で構成することに助力する⁷⁾。その歴史像が普遍的な性格をもちえたとき、これは「世界発展の連続性」という形象となるだろう。そのため、彼の講義サイクル⁸⁾は、ヨーロッパ普遍史の見取り図を描き、そのような形象の模範を提示したものと考えられる。

教養層の「特別な義務」は時代特性的な性格を帯びていた。なぜなら、第二点で、対立概念として登場する野蛮人は、後述するように文明化以前の未開人のみを指すものではないからである。彼らが内面に構成

すべき形象は、それに抗する価値となりうる。そのさい、歴史研究を行うべき教養人を意識ある者とし、野蛮人を無意識の相においてとらえていることに注目したい。それは第三点に引き継がれ、意識ある存在としての人間と無意識の存在としての動物が対比されている。過去と未来に対するまなざしをもたない動物は、まさにニーチェの『生に対する歴史の利益と弊害』の冒頭記述と重なるだろう。ニーチェはそれによって非歴史的なものが民族や文化の健康にとって必要であることを説いたが、ブルクハルトは、歴史的なものが人間の本質的要素であることに導くのである。

人間は歴史をもつ者であり、意識をもつ者である。この根本的命題がゆるがされたことが、教養ある市民層の現代的役割を生み、ブルクハルトの知的営為の目的を定めた。その内実を具体的に見定めるためには、人間の本質をなす歴史と意識の関係が明らかにされなければならない。その場合、歴史なるものの二重性に留意するべきであろう。つまり歴史的形成物としての歴史と、認識としての歴史とである。人間は、一定の時代の歴史的世界に生きる行為者として、歴史的形成物の生成に参画し、その一方で、認識者として過去の時代に対する歴史認識を試みている。この二つの歴史は相互不可分の関係にある。なぜなら、行為者としての人間は、過去に対する認識にその行為を条件づけられており、認識者としての人間は、時代制約から完全に自由になれないからである。とはいえ、この両者を区別して考察することは可能であり、必要である。ここではまず、歴史的形成物としての歴史に対するブルクハルトの見方を検討し、つぎにそのような形成物によって構成された世界のなかで試みられる認識としての歴史がもつ意味について、彼の思想に即して問うという手順をふみたい。

二、自然の切断とついでに歴史

ブルクハルトは講義「歴史の研究について」序論で、自然と歴史的
形成物とを比較しながら、その特徴を論じている。歴史は、その創造
発生、没落において、自然とは性格を異にするとしていたのである。
講義草稿には自然と歴史を対比する対照表が付されている¹⁰。それ
よれば、界、属、種からなる自然と、民族、氏族、集団からなる歴史
は、つぎの諸点において対照的である。すなわち、雑種の多寡、個体
の占める位置、形成物の可変性と完成度、経験の蓄積が形成物の発生
過程にかかわる度合いと仕方、没落の原因である。

これらを総合してみたとき、歴史は、その変転性と個体のもつ意味
において、自然とは際立った差異を有している。すなわち、自然はす
でに高度に完成された組織を具有しており、その生成のありようには
変化がなく、個体をもつ個性は何ら意味をもたない。それに対して歴
史的形成物は、その民族が高度であればあるほど不完全であつて、それ
ゆえ補完を求めて変転する。注目すべきは、そのような変転における
個体の果たす役割の大きさである。歴史における個人は不平等すなわ
ち個性的発展を目指す、そこから生じる優れた個性のたえざる影響
が歴史的世界にはみられる¹¹。自然界における個体が他の個体に対し
てなら作用をもたないのとは対照的である。自然界において雑種は
孤立し、種に変化をもたらしことはないが、歴史的な生活は雑種に満ち
ており、より偉大な精神的過程の結実に本質的にかかわっているかの
ようである。

自然は高度の完成された組織のもつて、長い時間的経過のなかでほ
んど変わることなくその生成を首尾一貫しておこなってきた。個体
は種の保存という目的に隷属するものであり、個体に対するまったく
の無関心が貫徹している。そればかりか自然界の組織は、それぞれの

種に敵対する種を配置しており、激しい生存競争を永遠に繰り返して
いる¹²。生物的基础においては自然界と接点をもつ人間が、それとは
異なる独自の生活を営むのは、人間だけが歴史をもっているからであ
る。すなわち、歴史は自然状態の切断であるといえるであろう。自然
を終わらせ、歴史を始めさせるものは何であろうか。ブルクハルトは
そこに「目覚めた意識¹³」の力を想定しているのである。

意識とは、いま現在の自分を知覚するものである。それは人間固有
の知的働きであり、自然界には意識の働きは存在しない。自然界にお
いて生命を育み、生存競争に駆り立てるものは、遺伝的資質である。
それは高度に完成された自然の組織的な力の分有であるといえる。同
じ種の中においては、時間の経過にかかわらず同じ資質が起動し、同
種の行動が生じる。経験の蓄積の影響は認められるが、それはきわめ
て緩慢にしか作用しない¹⁴。動物はその資質が発する衝動にしたがつ
て生きるが、その行動はつねに必然的なものであり、ときにそれを妨
げるものは外的な偶然だけである。その衝動を意識することがないが
ゆえに、それに抗する自由もまた存在しないからである。

人間に目覚めた意識は、自らの思惟や行動をあたかも外側から眺め
るかのようには知覚させる。それを可能にするものは、現在から浮上し
た別の視点の存在であろう。ブルクハルトは、動物と人間を区別する
ものとして過去と未来に対するまなざしをあげていた。時間的なもの
を認識することによって、現在は相対化される。そこに介在するもの
は比較という知的な働きである。それによって自らの内側に存在する
ものも、外側にあるものと対比され、その形状を明るみに出される。
その限りにおいて、内側に起動するものも絶対的なものではなく、い
くつかある選択肢のひとつとなる。意識は選択するという自由を与え
た。自然の営みが必然と偶然的産物であるなら、歴史の営みは必然と
自由の産物であろう。意識がかかわるために、歴史的世界における形

成物の生成・変成過程は、自然界に比べてはるかに急速に進行する。その過程において、民族に備わった資質のみならず経験の蓄積が大きな役割を果たす。とりわけ対照的なものや類似的なものから受け取った影響は明らかであるとブルクハルトは指摘する。¹⁵ 意識をもつ人間は、歴史という固有のダイナミズムをもった世界を構築していくのである。

三、意識、追想、継承

ブルクハルトは、歴史的世界を形成する人間の行動を意識という基礎の上に成り立つものと考えた。その意識は具体的にはどのように歴史的世界の形成にかかわってきたであろうか。それにかんじて、著書『イタリア・ルネサンスの文化』(一八六〇年)が格好の材料を提供してくれる。そのなかで、ブルクハルトは中世とルネサンスを対照的な歴史的世界として叙述したが、その根底に中世人とルネサンス人における意識の働き方の差異を洞察していた。共通のヴェールの下でまどろみ、なかば目覚めていたにすぎない中世人の意識に対して、そのヴェールが霧散し覚醒したルネサンス人の意識がある。¹⁶ この意識が向かう方向は、世界と人間の内面という二つの面において考察されている。

信仰や妄想を題材に織り成されていたヴェールを通して眺めていた中世人にとって、世界と歴史は不思議に彩られたものであった。地上世界で起きる出来事は、天上の何ものかと照応するものであり、事物は不可思議なつながりで緊密に結びついていた。それに対してルネサンス人は、自分の周囲の世界を客観的に考察し、処理しようとする。彼らは冷静な観察によって、世界の個別的性質や因果関係を認識し、それに対応した合理的形成物を創出していったのである。徴税制度、人材登用法、臣民の統治方法、支配権の確立とその維持、それらすべて

が、合理的に調整されたシステムであった。そのようにして、中世の伝統的な国家行政に代わって登場したものをこそ、「打算と意識の創造物」¹⁷(傍点引用者)としての国家である。世界に向かう意識のありようは、国家形成から、自然科学の発達、風景美の発見や日常生活の洗練にいたるまで影響を及ぼし、中世とは異なる歴史的世界の構築を促した。

人間の内面に向かう意識において、中世のヴェールは、人間の自己認識を種族や民族、党派といった団体的なものの一員としてのそれに限定してきた。ルネサンスの人間は、自らを精神的な個人として認識する。¹⁸ それは激しく変転する政治生活のなかで、個人的価値を最重視する個人主義へと発展し、やがて特定の都市国家に帰属しない世界市民主義さえもあらわれた。¹⁹ ルネサンス期に万能の人が数多く輩出した背景には、このような自己認識が前提条件としてある。そこから、自分の人格を个性的かつ多面的に、最高度に完成させようという意欲と努力が生じたのである。さらに内面に向かった意識は、自分の内面に叙述すべき豊かさを発見し、詩歌の分野に新しい境地を開いた。個人的な繊細な情緒、主観的なものの力が客観的な真実と偉大さをもって丹念に叙述されるにいたる。ダンテの『神曲』は、その構想と理念は中世に属するものであったが、この壮大な詩篇に表現された内面世界は、本質的に近代詩のはじまりを示していたといえよう。²⁰

このように覚醒した意識は、世界と人間にさまざまな価値あるものを発見し、新たな歴史的形成物を構築する活動一切の基礎となっていた。その形成過程に他者の知見や経験が、介在したことは重要である。王位に就いた最初の近代人とブルクハルトが評価する神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世は、イスラム諸国家の行政について詳細な知識をわがものにしていた。²¹ 彼が施行した税制や貿易活動に対する支配には、イスラムの制度や経験が大きく作用していた。そして、ルネサンス文

化が中世の想像力世界を脱するためには、物理的世界と精神的世界についてのたんなる認識経験だけでなく、指導者としての古代の知見を必要としたのである²²。

そのさいに、人間の生形成に大いなる影響を与えたものは、知覚した過去の文物でなく、その偉大さに共感し感得した過去の形姿であった。追想、すなわち、過去の人びとの生き様をまざまざと思い浮かべたことを通して、過去から刺激をうけたのである。ダンテが、ローマの城壁の石は畏敬の念に値し、都市が立つ土地は人びとが語るよりもずっと威厳があると述べているように²³、大量の古代遺跡が残る廃墟の都ローマ自身が、ルネサンス人に与えた影響は計り知れない。フィレンツェの歴史家ジョヴァンニ・ヴィラーニは、一三〇〇年の記念祭にこの都市を訪れ、故郷の歴史を描こうという決意をたずさえて帰郷した。ローマの廃墟を眺めうちに呼び起こされたこの決意を、ブルクハルトは「記念祭最良の収穫」と評価している²⁴。廃墟がヴィラーニに与えたものは、古代ローマの偉大なる栄華の記憶であり、この都市で活動した人々の姿であった。その栄光もいまや廃墟と化して深い眠りについている。彼は興隆しつつある故郷に思いをはせ、故国の過去一切を記録しようと決意した。古代ローマの追憶が、一〇〇〇年以上の時を隔てて、『フィレンツェ年代記』執筆に刺激を与えたのである。

過去の偉大な業績に学び、後代がそれを継承していくことも、自然界にはない現象であろう。偉大さに触れたとき、人間は驚嘆する。その感情はこれまで知ることのなかった高い価値に気づき、既存の価値基準が突如変容したときに生じる。それはその価値がわかる者にしか沸き起こらないが、しばしば直接の子孫ではない民族に生じているのである。後世の異民族が、一種の文化的相続権といえる「驚嘆の権利」²⁵を主張し、高度な文化の特性である復興能力によって事業後継者となっていく。ブルクハルトは、そのような異民族間の文化的継承関係

を、歴史的世界特有の現象として重視し、古代ローマのギリシア愛好またヨーロッパ全域でおきたルネサンスにその典型をみる²⁶。そこにはたんなる生物学的遺伝関係とは異なるつながりが存在しているといえるだろう。

そのような歴史的世界においては、生命の消尽、没落もまた自然界とは異なる性格をもたざるをえない。自然における没落は、地震や天候の激変、あつかましく卑俗な他種の蔓延などの外的な要因によって起きるが、歴史における没落は内的衰微がつねに先行する。外的な一撃はそれに最後の決着をつけるだけである²⁷。

四、人間の精神

ブルクハルトは、歴史的世界の根底にあるものを探し求めてきた。それは追想や文化的継承関係といった自然界とは異なるつながりを可能にするものであり、意識をもつ存在としての人間を根拠づけるものである。

異民族間の文化的継承は、時代的空間的に遠く離れた個人から決定的な影響を受けることによって生じた。そのとき、個人と個人を結びつけたものは何であったであろうか。物質的な利害関係は、両者の距離が広がるにつれて希薄になるであろう²⁸。利害関係から解き放たれるにつれて、立ち現れるものは純然たる関心である。それは、利敵関係にない人物の運命、決意、仕事に意識を惹きつけ、その詳細についてさらに知ることを欲求させる。ブルクハルトはそのような関心の根拠として、地上的物質的なものとは異なる大きな存在を予感したのである。

彼にそれを確信させたものは、絶望的な闘いにおいて滅亡した古代の民族や都市住民たちの姿であった。古代ペルシア、アッシリアなど

の世界帝国建設の過程で滅ぼされた諸民族たちは、すでに記録上からもその存在が消し去られている。おそらく彼らは孤立した王城で戦慄するような最後の決戦をしたのであろう。ハルパゴスに滅ぼされたりディアの諸都市、カルタゴ、ヌマンティア、ティトウスにユダヤ戦争で滅ぼされたイエルサレムなどは、最後の戦いと滅亡の記録が残っている。降伏せずに玉砕を選んだ「彼らの闘いは無駄であったのであるか²⁹」。そのように問いかけるブルクハルトは、これら住民たちの壮絶な最期から、ひとつの重大な事実を学びとった。すなわち、人間にとって個々人の生は、けっして最高の財宝ではないということである。

歴史における個々人の破滅は、地上世界の深淵を垣間見させる。だが、破滅へと向かう絶望的な闘いを自ら選択した人びとの姿は、自身の生命を代価に守ろうとしたもうひとつの存在に光を当てる。それは地上に限定された個人的な生命よりもいっそう高次で、より全体的共通的なものである。それは遠く離れた場所や時代にもぐら^{ヴェニラ}のように出没し³⁰、その形態はつねに変転しているが、地上からけっして消え去ることのない存在であった³¹。ブルクハルトは、それを「人間の精神」と呼ぶ³²。これは、けっしてありふれた抽象概念ではない。広い歴史的地平を見渡し、長い歴史の流れを通観したとき、その実在をさまざまなと実感できる存在である。その歩みは、ギリシア、ローマ、ケルト、ゲルマンといったヨーロッパ諸民族の文化を貫流し³³、あたかも「ひとりの人間の人生³⁴」のような形姿をもっていた。その精神こそが、地上に生きる自己存在を外側から眺め、これを意識する根拠であり、遠く離れた人びとをつなげているものと考えられたのである。

人間の生の根底に看取することができる生き生きとした精神の働き。それは、文化史、美術史の両分野においてブルクハルトが求めてきたものであった。古代ギリシアの建築物を眺めるとき、その目は建築物

の石材に注がれているのではない。石材を使用して造形美を作り上げた精神をみているのである³⁵。それと同様に、彼が歴史的世界の考察によって看取しようとしているものは、団体や個人を通して発現する精神の形姿であった。「これらすべての現象のうえに漂い、それらと密接にからみ合いながら、新しい住処を建てていく³⁶」人間の精神は、歴史的世界のなかで行動する個々の人間とどのような関係にあるのであるか³⁷。

人間精神と個人との関係は、ブルクハルトが終生、自由と必然の問題を重大な哲学的課題と考えたことに象徴されるように複雑である。「歴史的生は何千もの様態をもち、複雑で偽装をとめない、ときには自由にとときには不自由なうねり、樂觀的にも悲觀的にも作用する。数々の国家や宗教、文化を打ち立てては壊す。それらは名状しがたくほのかな謎として感得するほかない³⁸」。多彩な様態をもつ歴史的世界に対する彼の視線は、全体的なものと思議な一致をみた偉大な個人に焦点が合わせられている。その個人は、一般的なもの第一級の証人であるが、全体に対する位置関係は一樣ではない。理想的なものをおらわす者に対して、時代特性的なものをあらわす者が登場し、時代の例外者として独特なかたちで普遍にかかわる者に対して、標準人的にそれを代表する者が対置される³⁹。人間精神という全体と個人との関係もまた多様であり、歴史的世界の複雑さと呼応するものであったといえるだろう。

ブルクハルトによれば、全体的なものは同時代の人間にとって無力感を味わうほど大いなるものであり、人間の認識能力にとっては、後代にならなければ、それが何であったかを指し示すことができないものかである。行動しつづつある個人の側からは、人間の精神は不可知の領域に位置する。それにもかかわらず、精神は個人の行動を通して歴史的世界にその存在を刻印してきた。その目指すところは明瞭に認

識できないまま、意図せざる結果として個々人が高次の意志を実現していることがある。⁴⁰「文化を欲する者も、権力を欲する者も、ひよつとすると両者は、いまだ知ることのない第三者の盲目的な道具にすぎないのかもしれない」⁴¹。ここに控えめに語られているものは、人間の行動を究極において根拠づけている人間精神である。個々人にとつてたとえ未知の存在のように感じられたとしても、それは自身の行動の大いなる源泉であり、いっそう高次の「自己」なのである。

五、歴史認識の意味

歴史的世界を人間精神が展開する場としてみる立場において、認識としての歴史は、どのような意味をもっていたであろうか。その場合、過去は諸々の歴史的事象の無秩序な集積ではない。それは「精神的連続体」⁴²としての姿をあらわすであろう。もぐらのようにさまざまなる場所にあらわれる精神は、多様な事象をつなぎあわせ、ひとつのまとまりをもった全体を構築する。歴史は精神史として構造化され、世界発展はひとつの連続性の下に形象化される。そのとき、精神的な連続体としての過去を認識するものもまた精神である。⁴³ 時間的なものを理念的に把握する力である「わたしたちの精神」は、地上のさまざまなる時代を生き抜いてきた精神の歩みを自らの所有物としなければならぬ。⁴⁴ 歴史認識は精神の自己追想としてある。それゆえ歴史認識がもつ意味は、認識にかかわる個々の認識者に対してのみならず、認識の対象であり高次の主体である精神に対しても、考究されなければならない。

認識行為を試行する個人にとって、精神的追想としての歴史認識は、地上に限定された個人的な存在性を離脱する行為としてあり、したがってそれは、高次の自己を想起する行為となる。歴史認識は過去の

諸時代と現在とを対比し、現在を相対化することを必然的にもなう。そのとき認識者は、特定の時代に束縛された自身の個性をいっそう強く意識するであろう。意識化は対象化であり、対象からの距離化を可能にする。自分の個別性、時代制約性を意識するとき、自らに対する拘束性はわずかながらも緩められる。それは特定の歴史的世界に生きつつも、認識行為を通して類型的・普遍的な世界へと参入する瞑想への端緒となる。そこにおいて事物の関係は物質的利益から解放され、精神化されている。その限りにいて省察はいっそう客観性を帯びるのである。認識主体の自己認識も変容する。制約された地上的存在として苦悩する利己的存在を離れ、いっそう高次で共同的存在形式に回帰していくのである。

ブルクハルトは、そのような瞑想に、物質的必然が支配する地上世界において可能な「わたしたちの自由」を看取し、それを「高次の要求」と評価している。⁴⁵ すなわち、そのような自由を必要としているものは、むしろ高次な存在である。なぜなら、自由な瞑想的歴史認識こそが、人間精神の全体性と永続性を保証するものだからである。時間的経過は新たな経験をつけ加え、その全体にたえず変容を迫るであろう。精神は新しい経験をこれまでの歩みと関連づけて、自己の一部としてとりこまなければならない。各時代が過去に対する追想を行うことによって、過去は精神的連続体としてひとつの全体を再構成する。その追想自体もやがて過去の遺産としてその連続体のなかに組み込まれていく。⁴⁶ そのようにして、精神の全体性は確保されてきたのである。集団としての人間存在は、出生する者と他界する者によって、たえず成員の新陳代謝が行われている。その人間存在を担い手とする精神が変転するが消滅しないのは、精神的追想が営々と行われてきた結果である。精神的なもの連続性が「わたしたちが知らない器官」において保たれているのかどうかについては、認識することはできない。⁴⁷

それゆえ、歴史認識を通じて過去とのつながりを創出することが、精神的なものの存続を約束する確かな手段と考えられた。

この人間精神の永続性こそが、歴史的世界独自のあり方を可能にするものであった。自然界における個体は、死に絶えることによってその存在そのものが消滅する。だが、歴史的存在である人間は、追想を通じて精神的連続体に組み込まれて「生き続ける」ことができ、その影響を長く地上にとどめることができる。個体としての生命が尽きたとしても、その存在は消滅性を免れている。それは精神をもつ人間特有の存在形式である。それを根底においてささえているものは、各時代が、精神的追想を行い続けてきたという連続性である。ブルクハルトはそこに、人間存在の本質的関心事、人間存在の永続性もつ意味を形而上学的に証明するものを求めたのである。⁴⁸

六、現代の危機

ブルクハルトは、フランス革命をもってはじまる現代に、革命時代という呼称を与えていた。たえざる現状改訂、永続的な革新を時代的特徴とするこの時代に、彼は歴史家として大きな危機を洞察していた。しかも、それはこれまでヨーロッパ世界が経験してきたいかなる危機とも異なる性質のものであった。彼は歴史的危機を、漸進的で持続的な歴史的諸力間の相互作用が、加速度的に進行した現象と考える。⁴⁹人間の精神は、この急激な変転を乗り越えることによって、その永続的な生命力を開示してきたといえる。それどころか平穩時に妨げられ隠されていた精神的諸力が、危機の時期に表舞台にあらわれ出ることができたのである。ところが、革命時代はその激動が過去の白紙還元をめざし、精神的連続性の断絶へと向かう点において、あきらかに別種の様相を呈している。

この時代の諸現象のなかで、ブルクハルトがとりわけ危険視したのは、「自然にかえれ」と主張するルソーら啓蒙主義者たちの考え方である。それが歴史的存在としての人間の歩みを停止し、自然状態に舞戻ることを意味していたからである。彼は啓蒙主義者が前提としている性善説的な人間理解に同意しない。人間の本性は「善と悪の混合物」⁵⁰であり、自然状態に近い人類には、動物社会と酷似した生存を賭した相互の闘いがみられることを指摘する。ハルトマン Eduard von Hartmann のダーウィンの「予言」にイローニッシュな支持を与えつつ、彼は革命進展の先に仮借なき生存競争を予見したのである。⁵¹歴史を失うことは、野蛮状態への逆行をもたらす。それは文明以前の未開とは区別される新しい野蛮時代の到来である。教養層と対比された「野蛮人」はこのことを指している。

ブルクハルトが革命時代にみた人間類型としての大衆は、野蛮化の兆候を示すものであった。所得と安全を第一とする彼らの功利的な生活態度は、自然状態からの浮上原理を失ったとき、必然的に現れるものである。高みへの志向をもった文化ではなく、たんなる生存が主要な関心事となる。⁵²可視的なものに執着する生の卑俗化や、画一化といった大衆化現象が引き起こされる。ここで展開される生存競争は、古代ギリシアのアゴンのような文化的な競争とは異質なものであった。なぜなら、それは人為的に平等な条件を創出して技芸の高さを競いあうような造形的構成をもたず、自身の生存を確保するために、いかなる手段を使っても他者を抹殺しようとする、生のままのエゴイズムに即したものであったからである。その手法がいかに巧妙化しようとも、その本質は、強者の弱者に対する強制、本来悪であるところの権力⁵³の行使にすぎない。列強が行う侵略戦争、さらには経済的搾取もまた、すべて野蛮化現象の一形態である。⁵⁴

歴史を喪失していくことによって、人間は独自のあり方をやめ、自

然界のそれに近づいていくことになる。過去と未来に対する洞見は失われ、現在に対する近視眼的な見方が優勢となる。何よりも、他と比較して自分たちを相対化し、意識化することが困難となる。したがって人間は自身を絶対化し、自らの欲望に盲目的に、すなわち無意識⁵⁵に動かされるようになるであろう。ただし、人間を突き動かす欲望は、完全なシステムを備えた動物のそれとは異なる。その欲望は、一定の枠内にとどまるものではなく、理念的に拡張された将来への希望と不安によって無限に掻き立てられたものである。それを制約してきた諸制度は封建遺制として革命が一掃した。欲望は永遠に充たされぬ性格をもち、それに動かされる人間を自他ともに不幸にする⁵⁶。革命時代の人びとは、つねに不満にさいなまれながら、たえざる改革を要求した。近代の創造物である大国家や大都市は、そのような充たされぬ渴望を回収しつつ巨大化の道を歩む。社会において実現できないような法外な欲望にも保障を与えようとする国家は、国債増発や戦争準備など、未来の世代の資産をあらかじめ蕩尽するような手段に訴える⁵⁷。それを大衆が容認したのは、歴史的感觉を失っているためである。そのような国民を統制し支配することは、為政者にとって容易なことである。

この現象を一九世紀における知の危機的状況が促進した。それは、大量に供給される知が、もはや人間の内側に作用する力をもたないという、知の外在化状況である。かつて人格陶冶の必然的な手段であった教養は、教育資格として社会的階梯における上昇を約束する外的手段となり、上層階層のステータス・シンボルとなった。教養を人権として要求する風潮⁵⁸はここから生じてくる。ブルクハルトが注視するのは、アビトゥーア取得後に喜んで古典語を忘れようとする学生たち⁵⁹や、普遍的教養に属しているという理由で画廊を呻吟ながら見て回る教養市民層たち⁶⁰の姿である。もはや、知は内側から人間を発達させ

るものではなく、外側から人間を裝飾するものと化していた。おびただしい知の奔流は、感覺を鈍磨させ、異常なものや新奇なものだけにしか感応しない俗物的な人間をつくりあげるであろう⁶¹。この見解は、ニーチェが洞察した時代の病弊、教養俗物⁶²と問題意識を同じくする。人間の内側の野蛮化は、外側の文明化と矛盾しない。ブルクハルトにとって教養俗物とは、知の外在化によって陶冶されない自然状態の人間が、外的な知の成果を無秩序に大量所有している状態を指しているのである。

ブルクハルトはその先駆をアメリカ合衆国における「非歴史的教養人⁶³」に看取する。旧世界時代の歴史と彼らは、その本質的部分において切断されている。雑然たる移民から生まれ出た新しい国民は特有の頑健さをそなえ、外界の文物をたくましくわがものとしていく。だが、そのたくましさは、歴史的つながりをもつ重みや繊細さを失うことを代価としている。過去の知的遺産は外在するぜいたく品であり、知的営為はたんなるビジネスの一部門となるだろう⁶⁴。そのようなあり方は、交流の促進とあらゆる制約の撤廃を目指す文化の獲得的な側面をたしかに発展させてきた⁶⁵。

だが、ブルクハルトはこれが文化の最上の部分と相いれないことを見逃さない。なぜならそれが引き起こす不断の活動と競争が、「すべての瞑想の母であり、瞑想から生まれ出る飛翔の母⁶⁶」である閑暇を奪い去るからである⁶⁷。瞑想は人間精神が必要としたものであった。その瞑想を生み出す充実した時間、地上的営みから解放された時間である閑暇が失われるということ。それは、変転しながらも生き続けてきた人間の精神そのものが、いまや消失の危険にさらされていることを意味している。ここに革命時代固有の危機がある。それは地上的存在、個々の人間にとっての危機である以上に、高次の共同的存在にとつての危機なのである。精神が失われてもなお、人類が存続することは

可能であろう。それどころか進歩史観が唱える未来像に示されるように、高度な文明の利器によっていつそう「快適」な生活を手にしているかもしれない。だが人間を人間ならしめてきた内的根拠は失われているのである。自然から浮上した歴史的存在としての人間ではなく、自然状態にある動物すなわち自由なき存在として生存しているのにすぎない。まさしく現代は、「まったく物質の手にゆだねられてしまうかもしれないような時代」⁶⁸なのである。

七、精神と歴史

人間の精神が危機にあるということ。それは、人間が高次で共同的なものとのつながりを失うことの原因であり、結果である。もはや、不可視な全体的存在は、革命時代の人間にとって実感することができない「高尚な概念」へと縮小していく。実生活はそれとは別の原理、地上の可視的なものによって営まれていた。それは、事物の合理的な処理、利権要求といった、より「確実な」ものに依拠した近代的生活である。だが、先述したようにブルクハルトはそのような生活の根底に、つねに充たされない欲望の存在を洞察していた。主観的な幸福感は高まる要求水準にたえず脅かされており、「教育や交通の普及によって、苦悩の意識や性急さも目に見えて急増している」⁶⁹状況にある。国民の渴望を回収する諸国家が、増強された権力を行使していつそう大規模な生存競争を展開することが予想されるとき、地上的存在の生存自体もけつして確実なものとは言えない⁷⁰。

ブルクハルトの歴史学教育は、そのようなかつてない危機への対応という社会実践的な性格をもっていた。人間が自然状態化し、いま現在の欲望につき動かされる現況に対して、歴史的存在としての人間存在を再興することによって対抗しようとしたのである。それはナポレ

オンのような革命時代の独裁者が本能的に嫌悪したものであった⁷¹。各時代の状況を比較し、現在を外側から意識的に眺める存在は、統制や煽動の対象にもつとも不適合であったからである。歴史的存在を再興するためには、過去との精神的連続性を回復することが不可欠である。それは過去についての単なる知識を蓄積することを意味するものではない⁷²。なぜなら、ブルクハルトが求める精神的追想としての歴史の知は、詩歌や芸術と同等できる性格のものであり、外在化する知識ではなく、内在化する体験であったからである。詩人の創作が他の詩人のそれと代替できないように、精神的追憶もまたその時代固有のものである。各時代はその時代にとって興味深く思われた過去の事象を書き記す⁷³。そこにはそのときにだけ可能であった過去と現在の精神的邂逅がある。歴史家の内面を通して過去との間にその都度、創造的に架橋されたつながりこそが、精神的連続性を構築してきたものである。

ブルクハルトが歴史において重視するものは、実証された史実ではなく、このような内的なつながり、とくに内面において構成される全体的な歴史像であった。なぜなら、それこそが人間に内側から働きかけ、人間を歴史的存在へと形成する教育力をもっているからである。その形成力は、歴史像のみならず、それを構成しようとする努力と心的な力にも存している⁷⁴。そのことは、史料の多くが失われ、いくつかの断片化した残存物しか遺されていない過去について認識するときにとりわけ顕著である。たとえば古代建築などは、往時のままに残っているのではなく、その多くの部分が失われている⁷⁵。そのような失われた過去に対し、歴史考察は断片化した過去の残存物から全体像を再構成しようとする。想像力によって失われた部分を補い、残存する断片をつなぎ合わせ、全体を心像として復元していく。これらを可能にするものは、遺されたものへの畏敬と失われたものへの憧憬とであ

る。⁷⁶

ブルクハルトが、そのような復元作業を「今日における宗教の一部をなしている」とその現代的意義を高く評価したことは、注目に値する。宗教とは人間本性の永遠かつ不壊の形而上学的要求の表現であり、⁷⁸ 地上的なものと拮抗する歴史⁷⁹的諸力である。この宗教と国家、文化が均衡を保ちつつ相互規制するなかで、ヨーロッパの歴史的世界は展開してきた。そこにおいて人間精神は歴史的生のあらゆる方向に自らの力を刻印しえた。⁷⁹ところが、近代史の主要創造物・大国家⁸⁰の登場が、この均衡状態を破った。地上的な獲得面に傾斜した文化は、国家のプログラムを起草してその膨張を促進し、宗教改革以降の世俗化した宗教は、巨大化する国家に保護を求めた。⁸¹この過程で宗教はその本来的な機能を喪失していくことになるだろう。地上的なもの一切の守護者として国家は尋常ならざる膨張を続け、多様性と自由をヨーロッパ世界から放逐しようとしたのである。それは革命時代の人間が自然状態化し、物質的利便を精神的文化よりも優先したことと軌を一にしている。ブルクハルトは、地上的なものの圧倒的な力に抗し精神を擁護する立場から、地上的なもの⁸²の価値を否定しこれから離脱しようとする宗教の禁欲的側面の残存に希望をつないだ。⁸²そして、失われつつある宗教の機能の一部を歴史認識に期待したのである。過去の復元作業がどのようにして、そのような働きを獲得するのであるうか。その作業において内面がたどる過程に焦点を当てながら考究していくことにしよう。

対象となる失われた過去は、認識者自身が知悉しているものより高い存在であり、経験の範囲を超えた未知なるものである。それゆえ認識者は、対象に対して「受動的な」開かれた姿勢をとるようになる。想像と予感の領域に足を踏み入れながら、失われたものを理想的なものとして探し求めていく。そのとき憧憬に促された想像力は、高みを

めざして飛翔し、既存の判断基準を高めるべく作用するのである。だが、遺された断片に対する畏敬の念が想像力の働きを抑制して、それを恣意に陥らせない。真正の史料は当の時代に即しており、現在に迎合することはない。⁸³認識者は苦心して対象が規準としているもの自らを合わせつつ、それが語りかけてくるのをひたすら待つほかないのである。そのような史料に対する正しい姿勢「軽い傾聴⁸⁴」を忍耐強く続けるとき、その褒美として運命の瞬間が訪れるとブルクハルトは予言する。⁸⁵そのとき、長らく既知のものと考えていたものから、突如直観がほとばしってくる。過去の精神と現在の精神が出会った瞬間である。その直観は、これまで認識者がもちあわせていなかった新しい事実を告げ知らせる。それを受容し内的に統合しようとするとき、内面は変容せざるをえない。その変容は、高い対象との距離を短縮させ、認識者を離陸させるのである。

革命時代の知性は、対象を分析する機能に特化し、対象を支配する力を増大させてきた。それは物質的な力を増強するとともに、地上的なものに執着する志向を個人に与えた。生存競争の激化という現況をかんがみたととき、その執着には未来がない。畏敬と憧憬による歴史的復元作業は、それとは対極的な内的過程を通して、共同的な高みへと回歸していく営為である。その作業は地上的なものに拮抗する力をおのずともつだろう。それが目指す過去の偉大さと美しさは、人間精神の高貴な本質に由来するこの世ならざる稀少なものであり、それゆえ地上的なものの対極に位置するからである。認識者は視点を上昇させ、地上の個人的存在を忘却するにしたがい、このもうひとつの本性を回復していくのである。

「もしわたしたちが、自分の個人性を完全に打ち捨て、来たるべき時代の歴史を、ちょうど自然の光景を、たとえば陸地から海上の暴風雨を眺めるときのように、平静かつ不安な心持で考察することができ

たとしたなら、わたしたちはおそらく精神史の最大の章のひとつを意識しつつ体験することになるであろう⁸⁶」

このように理想的⁸⁷に語られた歴史認識の究極は、地上の個人から解き放たれ、人間精神の境域にまで上昇した認識者が、歴史を眺めている姿である。その歴史とは精神自身⁸⁸が変転しつつ歩んできた道程であった。かつては喜びであり悲しみであったことが、いまや清澄な認識となる⁸⁸。幸福や不幸が交錯する地上世界を遠くはなれ、認識という精神にとつて重要なものだけがそこにある。もはや時間的なものも及ばないような次元で、精神は自らを追想している。その境地はたしかに「同時代の地上的存在にはそうではないが」、永遠の相にある人間精神の立場からは「素晴らしい光景」であるだろう⁸⁹。その境域に参入しようとする者にとつて、地上の幸不幸はしだいに意味を失っていく。地上的な個人性を追求しかえってこれに苦しめられてきた革命時代の人間にとつて、それはひとつの救済となるであろう。そのとき歴史は、宗教としての役割さえも果たしえるのである。

おわりに

ある人たちの幸福は他の人たちの苦痛の上に成り立っている⁹⁰。そのように考えるブルクハルトは、事象をつねに多角的に観察していた。その眼には、さまざまな時代や民族、団体、個人が、自身を中心に世界を眺め、意欲し行動するさまが映し出されていた。それらが抱く願望は盲目的なものであり、互いに矛盾しあっていた。そのような個人的なものを寄せては返す波⁹¹と観ずるとき、そして、その波のひとつに自分たちをもふくめるとき、認識者はすでにそこから浮上しはじめているのである。とはいえ、ブルクハルトは、下界を見下ろすような孤高の視点に立っていたのではない⁹²。清澄な認識を求めながらも、

あくまで人間として共感的に歴史を眺めようとしていた。なぜなら、地上的存在である自身もまた苦難に出会う者であるからである⁹³。だが、その苦難こそが、人間精神の力があらわれ出る場であった。過去の人間の忍耐し努力し行動する姿への情念論的な視線⁹⁴、苦悩への共感を通して、共同的なものへ回帰する道は開かれたのである。

ブルクハルトが歴史学教育において教養層たる学生たちに求めたものも、そのような姿勢であった。彼らもまたいずれは特定の価値を支持して何かしらの行動をとらなくてはならない。しかし、普遍的な歴史認識の余地は残しておくべきであるとブルクハルトは助言する⁹⁵。それはいわば二重の自己を生きることである。意図にしたがう地上の自己に対し、認識を求める高次の自己を対置すること。透明な認識への憧憬は、世界発展の連続性という形象を自らの内面において完全なものとしようとする欲求をおのずとはらんでいる⁹⁶。そのことは精神の永続性を約束し、人間を人間ならしめるものを地上の片隅にとどめることにつながるであろう。それを「意識をもつ者」としての彼ら教養ある市民層の「特別な義務」としたのである。野蛮化によって、人間は地上的な欲望に無意識に動かされるようになった。現代における弱者に対する強者の暴力や搾取は、そのようにして起きている。暗黒化する社会のなかで、教養層は唯一目覚めている存在といえるかもしれない。彼らを照らすものは、歴史認識が与える自由の光である。それは地上的存在が求めるその都度の利巧さではなく、人間精神が求める永遠の賢明さ⁹⁷によつてともされたものである。そのような光明がわずかにでも残っていること。ブルクハルトの希望は、そこに託されていたのである。

- 1 Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke* (GW), Bd. V, Basel/Stuttgart 1978, S. 12.
- 2 ブルクハルトが考える教養ある市民層 *Gebildete* は、古典語を理解し史料に直接アクセスできるという能力と、過去や世界に対する心的態度を共有する精神的な階層である。それゆえ教育資格によって明示される社会的階層、教養市民層 *Bildungsbürger* と重なりながらも、これとは区別されなければならぬ。彼はこの階層に自律した考察力を求めており、教養俗物化した教養市民層を除外しようとしてゐる (Jacob Burckhardt, *Gesamtausgabe* (GA), Bd. 13, Stuttgart, Berlin und Leipzig 1934, S. 27 f.)。また、美術史を教養のなかに位置づけることによって、古典語教育を受けていない人びとの一部もこの階層に位置づけていたように思われる。それを裏付けるように、ブルクハルトは青年商人協会 *Verein junger Kaufleute* における講演 (一八七三—一八七七年) を継続して引用受けつめた (vgl. Jacob Burckhardt, *Vorträge 1844-1887*, Basel 1918, S. 478-481)。
- 3 Karl Joel, *Jacob Burckhardt als Geschichtsphilosoph*, Basel 1918, S. 63 f.
- 4 ブルクハルトの歴史学教育については、以下のものを参照のこと。拙稿「ブルクハルト史学におけるヨーロッパ的なもの—歴史学教育の観点から—」『紀要』(弘前学院大学文学部) 第四六号 (二〇一〇年)。
- 5 レーヴィットは、ブルクハルトに対する判断を彼の人間観と歴史観の統一的全体から展開するという哲学的な試みの結果、「もともと高い意味において、大学における歴史の教師であった」という総合判断にたどり着いてゐる (Karl Löwith, *Sämtliche Schriften*, Bd. 7, Stuttgart 1984, S. 42)。ブルクハルトの営為全体を見通そうとすると、歴史と人間存在の根源的なつながり、そこから浮かび上がる歴史の教育的価値が必然的に問題とならざるをえなかったのだから。
- 6 ブルクハルト史学の教育的機能については、リューゼン (vgl. Jörn Rüsen, *Jacob Burckhardt*, in: H.-U. Wehler (Hg.), *Deutsche Historiker*, Bd. III, Göttingen 1972, S. 7 f.) やトーマツ (vgl. Ulrich Muhsack, *Bildung zwischen Neu-humanismus und Historismus*, in: Reinhart Koselleck (Hg.), *Bildungsbürgertum im 19. Jahrhundert*, Teil II, Stuttgart 1990, S. 88 f.) の指摘があり、ブルクハルトの後半生がバーゼル大学における教育に捧げられたという伝記的事項もなれば周知の事実 (vgl. Kurt Meyer, *Jacob Burckhardt. Ein Portrait*, München 2009, S. 91 ff.) となつてきているが、彼のライフワークであった教養層に対する教育を視座の中心にすえた研究は皆無に等しい。そのような研究が未開拓分野となつたのは、歴史家の知的営為を研究成果中心に評価し、教育活動や社会的活動を二次的なものとみなす史学史研究の枠組にも一因があると考えられる。その枠組を醸成した歴史学の科学化・職業化過程に対して、ブルクハルトが批判的な姿勢を示していたことを考えあわせるとき、従来の研究重視型の枠組そのものを見直す必要があると思われる。
- 7 拙稿「歴史学としての文化史学—ブルクハルト史学における実用主義」『紀要』(弘前学院大学文学部) 第四五号 (二〇〇九年) を参照のこと。
- 8 四学期を一サイクルとする複数講義の規則的な繰り返しによって、ヨーロッパ普遍史に対する理解を深化させるもの。ベルリン大学における師ランケの専門教育のスタイルを継承したものと考えられる (拙稿「ランケとブルクハルト」再論「普遍史をめぐって」『文化史学』第六五号 (二〇〇九年) を参照のこと)。
- 9 Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*, Bd. I, München/Berlin/New York 1988, S. 248.
- 10 Jacob Burckhardt, *Über das Studium der Geschichte* (SG), hrsg. von Peter Ganz, München 1982, S. 151 f.
- 11 *Ebd.*, S. 152.
- 12 *Ebd.*, S. 150.
- 13 *Ebd.*
- 14 *Ebd.*, S. 151.
- 15 *Ebd.*
- 16 *GW*, Bd. III, S. 89.
- 17 *Ebd.*, S. 2.
- 18 *Ebd.*, S. 89.
- 19 *Ebd.*, S. 92.
- 20 *Ebd.*, S. 211.
- 21 *Ebd.*, S. 2 f.
- 22 *Ebd.*, S. 119.
- 23 *Ebd.*, S. 120.
- 24 *Ebd.*, S. 120, 50.

- 25 SG., S. 283.
- 26 *Ebd.*, S. 298, 283. 一九世紀ヨーロッパの教養ある市民層の自己認識も、その系譜に属するものであるといえる。「わたしたちは古代文化民族のかたわらで子どものようにまごころんべいた民族の子孫であるが、自身を古代民族の真の後継者であると感じる (Jacob Burckhardt, *Historische Fragmente* (HF), Stuttgart 1957, S. 4)」。
- 27 SG., S. 152.
- 28 *Vgl. GW*, Bd. V, S. 9.
- 29 SG., S. 241.
- 30 *Ebd.*, S. 229, Anm. 18.
- 31 *Ebd.*, S. 228.
- 32 *Ebd.*, S. 246.
- 33 *Vgl. HF*, S. 193.
- 34 SG., S. 245.
- 35 Jacob Burckhardt, *Werke. Kritische Gesamtausgabe* (JBW.), Bd. 2, München/Basel 2001, S. 13.
- 36 SG., S. 246.
- 37 その場合、レーヴィットの比較論にいまいち立ち返らなければならぬであろう。すなわち個人を普遍化し世界精神の道具としたヘーゲルと、個人を単独化したキルケゴールの中間に位置するブルクホルトの立場である (Löwith, *a. a. O.*, S. 123 ff.)。
- 38 SG., S. 229.
- 39 *Ebd.*, S. 387, Anm. 35; *GW*, Bd. III, S. 96.
- 40 *Vgl. HF*, S. 168.
- 41 SG., S. 302, Anm. 52.
- 42 *Ebd.*, S. 229.
- 43 「わたしたちの眼は太陽的である。そうでなければ、太陽はみえなかったであらう (Ebd., S. 230)」。
- 44 *Ebd.*
- 45 *Ebd.*
- 46 *Ebd.*, S. 229.
- 47 *Ebd.*, S. 244, Anm. 24.
- 48 *Ebd.*, S. 244.
- 49 *Ebd.*, S. 342.
- 50 *JBW.*, Bd. 28, München/Basel 2009, S. 20.
- 51 *Ebd.*, S. 23 f.
- 52 SG., S. 325.
- 53 *Ebd.*, S. 260.
- 54 *JBW.*, Bd. 28, S. 20, 24.
- 55 「今日の人間はたんに社会的階層の大部分においてすでに無意識に国民性をもち、多様性の一切を憎むようになっている」(傍点引用者) (Jacob Burckhardt, *Briefe. Vollständige und kritische Ausgabe* (Br.), Bd. V, Basel/Stuttgart 1963, S. 104 f., an Friedrich von Preen vom 20. Juny 1870)。
- 56 SG., S. 302.
- 57 *Ebd.*, S. 325.
- 58 *Ebd.*, S. 284.
- 59 *GW*, Bd. V, S. 11.
- 60 *GA*, Bd. 13, S. 27.
- 61 *Ebd.*, S. 28.
- 62 Nietzsche, *a. a. O.*, S. 165 ff.
- 63 SG., S. 230.
- 64 *Ebd.*, S. 375.
- 65 *Ebd.*, S. 284.
- 66 *Br.*, Bd. VII, Basel/Stuttgart 1969, S. 49, an Max Alioth vom 6. August 1879.
- 67 SG., S. 284.
- 68 *JBW.*, Bd. 28, S. 8.
- 69 SG., S. 245.
- 70 *JBW.*, Bd. 28, S. 24.
- 71 Ernst Ziegler, *Jacob Burckhardts Vorlesung über die Geschichte des Revolutionszeitalters*, Basel 1974, S. 384.
- 72 ブルクホルトは失われた歴史的遺産のなかで、ベルガモンやアレクサンドリアの図書館にあった古代の知識の喪失については、最終的には断念することができるとしている。それが、近代の歴史的科学的知識によって代替可能であるからである。それに対して、歴史家の諸作品の喪失は、最高級の詩人の

- それと並んで、かけがえない損失とみなされている。その時代に行われた精神的追憶は、他の時代のそれによって代替できない創造的な性格をもっていたためである (SG, S. 244)。
- 73 *HF*, S. 198
- 74 ブルクハルトは、そのような内的作用に着目した判断を、第一回十字軍が達成したイェルサレム王国の復興に対しても下している (*GW*, Bd. IV, S. 80)。
- 75 さらに文化史における人間の言動はその時々々の状況によって左右され、その意欲のすべてを表出しているわけではない。語られなかった言葉、実現しなかった行動が無数に存在するのがある (*vgl. GW*, Bd. V, S. 5)。
- 76 *SG*, S. 244
- 77 *Ebd.*
- 78 *Ebd.*, S. 263
- 79 *HF*, S. 192
- 80 *Ebd.*, S. 77
- 81 *Ebd.*, S. 134
- 82 ブルクハルトは、この立場からキリスト教の禁欲的伝統を放擲し地上的な原理と妥協したプロテスタンティズムに対して批判的であり、国家から原理的に独立し、この世に対するペシミズムを代表するカトリシズムの役割を評価したのである。それについては仲手川良雄『ブルクハルト史学と現代』創文社、一九七七年、五九一六〇頁を参照のこと。
- 83 *SG*, S. 250
- 84 *GW*, Bd. V, S. 6
- 85 *SG*, S. 252
- 86 *Ebd.*, S. 245
- 87 講義「歴史の研究について」序論の一部であり、講演「世界史における幸福と不幸について」(一八七一年)の末尾を飾るこれらの文言 (*Ebd.*, 245 f.) は、接統法をつかった非現実話法で記されている。それは認識の透明な器となることを妨げる地上生活の重みを暗示するものと思われる。
- 88 *Ebd.*, S. 230
- 89 *Ebd.*, S. 246
- 90 *Ebd.*, S. 231, Anm. 3
- 91 *JBW*, Bd. 28, S. 21; *SG*, S. 237
- 92 *SG*, S. 229
- 93 *Ebd.*, S. 245
- 94 *Ebd.*, S. 226
- 95 *HF*, S. 192
- 96 *SG*, S. 245
- 97 *Ebd.*, S. 230